

## 産育に関する世代間伝承の実態と課題

語りの場に見る つながり のかたち

松本亜紀（倫理研究所専任研究員）

### はじめに

素晴らしい体験をした時、人は本能的に誰かに話したいと思うだろう。それが人生を変えるような出来事であればなおのこと。実体験には人の心を動かす力がある。ナラティブ（物語・語り・語り口）の力である。

筆者は長年、沖縄でオーラル・ヒストリー（関係者から話を聞き取り、記録としてまとめる研究手法）に関わった経験から「語り」のもつ力に関心を寄せてきた。近年は、人生の節目に行われる通過儀礼が、人の成長や親子・家族関係にどのような影響を及ぼすのかという関心に基づき、主に伝統的な産育儀礼の聞き取り調査を行っている。具体的には、お産を通して人が人と関わろうとする時に必要とされるコミュニティの形成状況を調べているのだが、それらの伝承実態をみていくと、現代の妊娠・出産・育児にも有効と思われる生活の知恵や身体の使い方、育児法などが受け継がれておらず、経験を「語る」側と「受け継ぐ」側との関係性に問題があるのではないかと考えるようになった。

本稿の目的とするところは、現代の妊娠・出産・育児の現場と母親達の現状を知り、より適切な関係を形成するために必要と考えられる情報や視点を提供することにある。妊娠・出産・育児の経験を「語る／聞く」ことが次世代の育成に豊かな影響を及ぼし、それらを通じて獲得・創造された情報や行動様式が、その後の家族関係や介護問題にも有効なアプローチになると予想されるからである。このような問題意識を踏まえ、本稿では、かつての日本の民俗社会に存在した女性の身体や出産に関する「語り」やそれを共有する「場」に着目し、産育儀礼や慣習が伝承されてきた背景と伝承の実態を明らかにすることで、世代間伝承のありかたを考えてみたい。